

平成28年度 みんなで学ぶ景観まちづくり市民教室

講演演題:ふるさとの記憶を未来に繋ぐ、そして景観まちづくりへ

講師:栗原 昭矩(くりばら あきのり)氏(いせさき街並み研究会代表)

日時:平成28年11月28日(月) 18時00分から20時まで

場所:かごしま市民福祉プラザ 5階 中会議室

【以下講演要旨】

皆さんこんばんは。群馬から来ました栗原昭矩と申します。こちらの景観まちづくり市民教室の副題が「実践者から学ぶ、住民主体の景観まちづくり」とありまして、このパワーポイントを作る時に、一番上にこれを書き入れましたが、心情的には細やかな実践者ということで、あくまでも群馬での細やかな活動を知って頂いて、何かしらのヒントになれば有り難いと思ってお邪魔した次第です。



I. プロローグ:ふるさと伊勢崎

私の生まれた伊勢崎市は、東京から100km関東平野の北端、人口も21万人、合併前は13万人という小さな地方都市です。江戸時代は2万石の小さな城下町でした。群馬県はかつて養蚕が盛んで、江戸の後期から織物が盛んになり、生糸を使った伊勢崎銘仙という織物が、特に明治期は日本中に出荷されました。



伊勢崎銘仙

伊勢崎銘仙は、元々農家のお母さんたちが農閑期にくず繭とかくず糸を使って織った普段着でした。太織りと言いました。それが段々商品として出回るようになりましたが、

明治時代に出回った伊勢崎銘仙はほぼ普段着でした。丈夫で安く良いと広まり、全国に販路を広げていました。伊勢崎銘仙にしか出来なかったのが経糸と緯糸双方の先染めです。独特の縞模様ができ、なおかつ経糸も緯糸も同じ色に染まるので、鮮やかな発色が出来ます。少し前の朝ドラ「カーネーション」で主人公の糸子さんが着ていたのがこの伊勢崎銘仙です。

鹿児島市は、昭和20年6月16日の大空襲で市街地の9割が焼けたと聞きました。私の地元は本当に悲惨で、終戦の前夜に4割強が焼けました。空襲で焼けた都市が全国に151都市あるそうですが、終戦後ほとんど国の政策によって戦災復興都市計画に基づいて街の整備が進められましたが、伊勢崎は戦災復興都市計画は作られたものの、その中で唯一実施されなかった。ちなみに、都市計画を作ったのは若き日の丹下健三さんです。そのため、戦後応急的に造られた木造住宅が密集した地域がその後も残っていて、消防車や救急車両が入れない、衛生的にも問題があるということで、平成に入って区画整理が始まり今も進められています。しかし、戦災復興都市計画が実施されなかった故に、江戸時代の道の形状がそのまま残っていましたが、それを知ってる人はほとんどいませんでした。

平成26年に「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、4つの構成資産が世界遺産に登録されました。その一つが伊勢崎市にある「田島弥平旧宅」です。

実は群馬県は養蚕が非常に盛んといいながら、現在も養蚕をしている農家は百数十軒しかありません。それでも一応日本一の養蚕県です。それほど日本の養蚕は衰退したということです。



田島弥平旧宅

ちなみに、なぜ「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産になれたかといいますと、富岡製糸場ができるまでは、絹製品は主に手工業で生産量が限られていました。それまでヨーロッパでは、貴族やお金持ちしか身に纏うことが出来なかった絹製品を、富岡製糸場という大規模な工場で機械生産することで、沢山の製品がヨーロッパに輸出され、一般の方も絹製品を身に纏うことが出来るようになります。世界の服飾文化に多大な影響を与えたという意味で、ユネスコから評価を受けたので世界遺産になれたのです。

以上簡単に地元の紹介をしましたが、これから私がこういう活動をするきっかけについてお話をします。

先ほど区画整理事業の話をしました。この区画整理事業が始まった 15 年程前は、私が地元で仕事を始めた頃で、地元のことを全く知りませんでした。行政が初めて主催したまちづくりワークショップに参加し、そこで区画整理事業担当課の方々と意見交換をする機会が設けられました。私は「これまでの区画整理事業は、どちらかという地域歴史がクリアランスされてしまうものが大多数でしたが、これからの区画整理事業は、出来れば見えなかった地域の歴史が見えるような事業になればいいですね。」という話をしました。

でも、当時の担当者から「この街には残して生かすような歴史はないんですよ。」と返ってきて私は驚きました。地元でこういう話をすると時々行政批判のように聞こえてしまっていますが、そうではなくて、それが市民の方もそう思っている一般的な当時の様相でした。歴史というと歴史が濃厚に残っている京都などをイメージするようで、こんな田舎町には将来に活かせるような歴史はないというのが一般的な価値観でした。

本当にそうなのか、と思いました。私は 30 過ぎまで横浜で働いて、Uターンして隣の前橋市で 10 年間設計事務所に勤めましたが、伊勢崎には縁がなくて地元の歴史を本当に知りませんでした。そこでそこから図書館にも行き私の学びが始まりました。調べると先達の方々がふるさとの歴史について沢山の本を書いている、この土地の歴史を伝えようという努力をされていました。けれども図書館の本の中に埋もれて、中々市場には出てこない。

そういうことをしている時に、町中にある幕末の文政年間にここで創業された醤油醸造元の建物（事務所と醤油醸造蔵は昭和 6 年に建てられた）がまもなく解体されて分譲住宅地になると聞きました。それで建売業者さんをお願いしまして一日だけ調査をしました。普段閉まっているお店の中に居ると、80 歳位の高齢の女性が入って来られて、「実はこの建物は、私の祖父が総支配人の時に造った建物なんです。父もここで 60 年間働いたお店なんです。この建物が無くなる、壊されると知ってから毎日泣いていました。主人に相談しても『もう決まったことは今更変えられないのだから諦めろ』と言われました。」と切々と悲しみを語ってくれました。



解体された醤油醸造元事務所と醸造蔵

調査後に簡単な図面と簡単な調査の資料をまとめて、後日その方のところに届けに行きました。「どこのどなたか判らない方に調べて、ちゃんと資料までまとめて頂いて、本当にありがとうございます。」と言って、涙をぼろぼろ流されました。

その後、更にここに書きました「蘇った記憶～綴られた手紙」というのは、資料を残したことで、蘇った記憶をその方が手紙に綴って何通も送ってくれました。最後の手紙が初恋の思い出でした。

群馬には近江商人が沢山来ています。このお店の主人は近江の日野町におられて、おばあちゃ

んはこちらに派遣された大番頭さんのお孫さんでした。子供の頃は日野町で暮らしていて、おじいちゃん、お父さんには暮れとお正月しか会えない。12歳の頃初めて丁稚小僧に連れられて伊勢崎に来られたそうで、その小僧さんが初恋の人で、その彼との初恋の思い出が蘇って、ちょっと微笑ましいようでありながら何とも切ないお話しでした。

この経験が私に古い建物を大事にするということは「モノ」ではない、という確信をくれました。そこに生きてきた方々の「心」を大事にするということなのです。古い建物そのものの価値というのは当然ありますが、もう一方の大きな価値や役割は、そこに生きてきた人々の歴史や記憶が建物に埋め込まれているということです。建物は記憶を伝えてくれる記憶の媒体なのです。古いものを大切にすまちづくりというのは、そこに生きてきた人たちの心を大切にすまちづくりに繋がるということが、そのおばあちゃんの涙から、大きな経験として体の中に染み込んでいます。

もう一つのきっかけですが、明治45年に造られた黒羽根内科医院旧館という洋館を、所有者の方が平成12年に伊勢崎市に寄付されました。見た目が本当に痛んでいたもので、寄付を受けても使用可能かどうかの緊急調査依頼を市から受けました。当時で建築から90年位経って相当傷んでいました。内部を調べると2階の床を支える胴差という部材が腐って柱とくっついていない。それでも建物は壊れないのです。実は木造の建物は修理がきき、そんなに傷んでいても使えないということはないのです。「使えない」という判断は「使いたくない」ということとイコールです。木造建築は手間、技術、ある程度の費用も必要ですが、まず使えるように出来ます。



使えるという調査結果を受けた伊勢崎市の意向は、譲り受けた後、解体して100m離れた市有地に再築するというものでした。そこで、地元のNPOの一員として市に「解体・移築ではなく、費用を抑えるという意味も込めて、曳家移転をしましょう。」と打診しました。市の中心街を通らないといけなかったので曳家移転が果たして可能なのか、簡単なことではないけれども是非やりたい。逆に、伊勢崎市が明治の洋館を曳家してまで、新たにまちづくりの拠点として活用するんだ、ということを広く市民に発信したいという提案をしました。

模索が続く中、警察からは街中の本通りを通行止めすることはお祭り以外に過去に事例がないということで最初は断られました。しかしこの活用をみんなでサポートするということで、私もまちづくり団体の発起人の一人となり、「伊勢崎タウンギャラリー」という活用を盛り上げるイベントを企画して、実行委員会として、今回のまちづくりの趣旨を説明し、是非通行止めさせてもらいたいと警察署長に改めてお願いをして、14の市民団体が曳家を盛り上げるイベントを行いました。

これが子供たちへのアプローチの最初の取組でした。何とかこの古い洋館をまちづくりの拠点に活かそうという取組を子供たちの記憶に埋め込みたいということで思案した結果行ったのが、子供たち約150人で明治の洋館を引っ張ることでした。子供たちが記憶にどう刻んでくれたかはその頃は判りませんでした。周りにはたくさんの方がいました。ちなみに、民法各社をはじめNHKで報道され、ニューヨークでも放映されました。明治の洋館を市民挙げてみんなで活かそうという取り組みは、何十億もお金をかけて取り組むよりもある意味で人々の心を引き付けるかもしれないということもこの時に実感したこと



子ども達による曳家体験

でした。

改めて子供たちへの手ごたえを貰ったのはそれから 10 年後です。10 年後の平成 24 年にこの建物が 100 歳になり、誕生日祝いの会を市民みんなでやりました。その時にこの建物の資料展をやったところ、女子大生が 3 人見に来てくれました。会場に来て開口一番「私たち曳きました！」と言ってくれたのです。この時は本当に嬉しかったです。それが、これをやった一番の目的なのです。故郷に対する何かの記憶、種を植えたいという想いでやったことで、この娘たちは 10 年後に来てくれた。種をもらってくれたと実感ができた瞬間でした。自分なりに「まちづくりってなんだろう？」「まちづくりって何に目を向けたらいいんだろう？」と少しずつ整理ができるようになりました。



「私たち曳きました！」

改めて資料に「活動の始まり」とありますが、事務所開設以来、自分なりに図書館に行ったり、まちを歩いたりしてきました。自分なりに活動を続けていると面白い依頼をもらいました。区画整理事業担当から「このまちには残す歴史はない。」と言われてから 3 年後に、区画整理事業の地権者への講演を頼まれました。そのタイトルが「歴史を活かしたまちづくり」、このまちには残す歴史はないと確か言ってたけど、と思いながらもお受けしました。

自分なりに調べると色んな記憶が残っていました。道路一本とってもアスファルト舗装された道路を通っているとそういうものは見えてこない。その当時やったことの一つが、江戸時代の寛政十年（1798 年）、今から二百年位前の伊勢崎の絵図に、現代の都市計画の白図を重ねることでした。すると驚くほど重なる。実は江戸時代までは絵図と言われ、地図と呼ばれるのは明治に入ってからですが、縮尺、道の幅員を含めて極めて正確なものです。現代の白図にほぼ重なってしまいます。江戸時代の道は全てそのまま残っているということが、ただ重ね図を作るだけでも判りました。江戸時代は、城下町に限らず宿場町等も、基本的には兵法上の構えで造られています。カギ折れの道を造ったり、十字路を造らないようにします。敵を待ち伏せ出来る、矢を射ぬけない等、様々な兵法上の構えです。今日鹿児島市内を見学させていただいたところ、鶴丸城の門を復元するということでしたが、あそこも直進できないですね。必ずカギ折れの仕掛けで入るようになっていて、道のそこかしこにそういう記憶が残っている。伊勢崎に戻りますが、駅前通りに S 字状に曲がった通りがありまして、車から見ると、見通せないから安全上問題だという話題にしかありませんが、江戸時代はそこはカギ折れの道でした。地元では「雁木折（がんぎおり）」と呼びました。カギ折れでは車が通れないので、明治に入って緩やかに結んだのが現在の S 字状の曲がり、歴史的な意味があるのですが誰も知らない。曲がって見通しが悪いから真っ直ぐ通した方が良いという話題にしかならない。だけど、そういうことを知ってくると、うかつには壊したいと思わなくなってくるのです。そのきっかけをつくるのが大事だと思いました。

「このまちには、残して生かす歴史が無いのではなくて、残して生かそうと言う目がない。心が無い。」ということが判りました。そうであれば、何とかそういう目をつくる、きっかけをつくるのがきっと第一歩なんだろうなという風に、自分なりに思うようになりました。

そのためにまち歩き案内人をしたり、時々、お話を頼まれると、「私は歴史の研究者ではないのだけど。」と思いながらも話しに行っています。実は、来月も地元の中学校で地域の歴史のお話を頼まれています。私はあくまでも未来を語るために過去を学んでいます。だけど、その学んだ過去が周りには新鮮なようで、最近、学校の研修会、去年は校長先生の研修会で地域の歴史の話をしてきました。

しかしそんなことをしていながらも、古いものはどんどん姿を消していき、更に区画整理事業が追い打ちをかけて、街の歴史が消えようとしています。それで、改めて私なりに出来ることは何かということ「活動」を始めたのが 2003 年です。

Ⅱ. まちづくり私論

Ⅱ-1. 私が守り、残し、伝え、育てたいと思う景観とは～そして景観まちづくりとは～

ここで「まちづくり私論」ということで、私が考える「まちづくり」のお話をします。結論がこれです。結論をなるべく先に持ってこようと思ひまして。

それは、私が私であり続けるために、欠かすことのできない普通に身の回りにある景観。これはまちづくりという点で全く同じと思ひておひまして、「私」を「このまち」に入れ替えるだけです。このまちがこのまちであり続けるために、やはり欠かすことのできないものがある。それがこのまちをつくり上げてきた景観そのものであり、それが「ひと」でもあるし、「もの」でもあるし、「こと」でもある。「ひと、もの、こと」それらをこれからに「生かす」ことがまさにこのまちにしか出来ない景観まちづくりだと考えています。

ちなみに私は建築の分野で生きていますので、先ほど文化財とか、古い建物の活用に専門的に従事しているというお話をしましたが、よく「古民家の活用」とか、「活用」という言葉がでてきます。活用の「活」という字を使われているのが多いですね。私は意識的に「生」きるという字を使っています。活用というどうしてもフィジカルなイメージが出てくる。ものを再生しましょうみたいな。だけど「生かす」は、そこに生きていた人たちの心を大事にして、未来に繋げて、それをまちづくりのために生かしてあげたい、という意味で「生かす」を使っています。過去を大切に未来に生かすという思ひを込めて。そういうものがあって初めてまちに対する愛着とか、誇りとかの種が生まれてきます。さらに言葉を進めると、そういうものを大事にするということは、まさにこのまちに暮らして良かった、このまちに生きて良かった、このまちを自分の孫や子供たちに伝えていきたい、と思えるような、まさに自分の幸せづくりに繋がるのです。

「景観まちづくり」というとどうしても、街並みをきれいにするとかの話題が主になりがちですが、それは街並みを綺麗にして何をを目指すのかということです。綺麗という言葉は良くないですね。「美しくする」です。美しくすることの意味は我が故郷を誇りに思えるような心を育てること。だから、景観まちづくりとは、直接的には街並みとか、風景をきちっと保全することですが、そこに暮らした人たちが、「本当にここに暮らして良かった。」「是非自分の次の世代に受け継ぎたい。」というような故郷を創るという幸せづくりなんだろうと思ひています。

Ⅱ-2. 日本におけるまちづくり変遷

戦後の日本のまちづくりは、ハード、いわゆるインフラ整備から始まっています。次に産業おこし、九州で言うと大分県の一村一品とかです。そういうものが出てきて、次第に、組織とか仕組みづくりに昇華していきます。

平成8年の阪神淡路大震災をきっかけに NPO 法人が多くつくられました。更に今はコミュニティデザインなど色々な分野で話題になっています。まさにコミュニティづくりとか幸せづくり、景観まちづくりも同じですが、こういう流れをもってまちづくりのあり方が移り変わってきていると思ひます。

それから「背景」、かつてまちづくりという言葉がなかった時代に、長い地縁社会の中での仕組みが連綿と受け継がれていました。けれども戦後大きな変化をもたらされます。急激な都市化、近代化で、全国で画一的なハード整備が進んで、結果として地域性がどんどん無くなっていきました。そして、バブルの崩壊、経済の安定成長とか人口減少の中で、まちづくりの拠り所が段々見えなくなっています。最近の潮流としては、地域独自の暮らしや生業（なりわい）を伝える記憶体である歴史資産や景観まちづくり資源が再評価をされつつあるのではないかなと思ひられます。

Ⅱ-3. 近年のまちづくり動向

いわゆるかつてのスクラップアンドビルドから（区画整理事業でよくこの言葉が使われますけれども）、ストックアンドクリエイトへ、今あるものを大事にしてその上に新しい暮らしを重ねていく手法、大量消費型から環境共生型へ、経済追求型から暮らしの場としての地域づくりとかですね。今回ここでも使われていますが、行政主導から住民主体へと変化を遂げています。

冒頭、まちづくりコーディネーターみたいなことも行っていると話しましたが、こういう社会の変化を若干感じつつも実際に取り組んでいると、相変わらず「これは行政がやってくれ。」「これは行政がしてくれないと困る。」という声が多く出ます。住民がまとまっていないところが、行政に何か支援してくれと言っても中々支援しづらいものです。主体は自分たちで、行政はお手伝いをしてくれる人、そういう視点で自分たちで出来るところから取り組んでいる所の方が、行政はサポートしやすいのです。そんなことも説明しながら話を進めますが、中々これは簡単には変わらないです。戦後日本は、全ての整備等を行政主導でやってきましたから、仕方ないと言えば仕方ない。

Ⅱ-4. まちづくりのプロセス

もう一つ、まちづくりのプロセスとありまして、まちづくりってどういう風に進めるんだろう。現状を知って、将来を探って、その手法を考えて、行動する。今はどんな現状にあるんだろうと知って、良い所、問題がある所、改善すべきところを知る。行政的な言い方では現況調査となります。続いて将来ビジョンの策定、事業計画の策定、そしてアクション（事業実施）、その後にローリングと言って、5年毎に見直す等が出てきます。

まちづくりというと、突然ばやーとして見えなくなるのですが、人間に^{たと}譬えると非常に判りやすくなります。例えば、皆さんに、私のこれからの生き方を考えて貰いたいと言う課題を出したとします。栗原という人間の将来を考えるためには、どういう人生を歩んできたのかをまず知らないで判りません。見た目、風貌もあります。これが「現状を知る」です。どんな人生を歩んできたのだろう、どんな学校に行って、どんな仕事をしてきたのだろうということを知らないで、これから先、どう生きたらいいかを考えることは出来ませんよね。これが「現状を知る」です。

次に、見た目もこんな感じだし、こういう学校で勉強をし、こういう仕事をしてきたのだったら、やはり将来は、世のため人のためのこういう事を行うのが良いのではないかと、色んな事が出てくる訳です。それが「将来を探る」です。

ではそのために、これから先こういう仕事や社会貢献をして貰うためには、今栗原という人間は何をする必要があるのか。そのためには、今もう少しこういうことを勉強した方が良いのではないかと、まちづくりのこういう奉仕をした方が良いのではないかと、これは手法ですよ。

「手法を考える」です。

戦後の高度経済成長の頃のまちづくりは、過去は良くないもの、捨て去るもの、それが輝かしい未来を創るまちづくりとっていました。過去は捨て去る、新しい街をつくるんだ、それがいいんだという価値観が台頭していました。国の政策もそういう形で進みました。

私の地元も空襲で焼けて、鹿児島も空襲で焼けて、日本はどちらかというと、空襲で焼けた都市というのは新しい街を造る、便利で暮らしやすくて快適な街を造る、その時にモデルとしたのは、アメリカ的な要素が中心だったと思います。同じ敗戦国のドイツは、全てとは言いませんが、都市が壊滅的な打撃を受けて壊された訳ですが、頑なに元の街に戻したのです。この違いは何だろうと考えることがあります。そのことは後ほど。

Ⅱ-5. 戦後の中心市街地のまちづくりの変遷と潮流を法制度から探る

先ほど、まちづくりはハードから心へ、という話をしましたが、それは私の考え方でもあるの

ですが、実は戦後の中心市街地のまちづくりの変遷を辿ると、そういう様相が見えてきます。

一番古くは昭和 50 年代位、当時の通産省が商店街近代化事業というのに取り組みます。これはまさにハードですね。古い町家が連なるような商店街では、これからの近代的なまちづくりには相応しくないと。古いものは全部壊して近代的な商店街を造ることが街中の活性化に繋がるといことで、国が補助メニューを用意して街を改変しました。結果として、国の補助メニューに則って進めたところは、全国画一的になっていく訳で、結果としてどこも求心力が無くなっていました。

次に、昭和 60 年代、単なる買い物だけの空間では駄目で、買物広場から暮らしの広場に商店街を変えていくというコミュニティ・マート構想に基づいて事業が進められました。地域の人々が集って、コミュニティ豊かな商店街づくりが目指されました。これが初めてのソフト事業です。商店街で買い物をしてサービススタンプが貰えるとかの始まりです。ただ街角に広場を造るとかには思いが及んだのですが、実質的なソフトとしてのコミュニティづくりには繋がっていませんでした。

その後、平成になってから出来たのが、中心市街地活性化法という法律です。様々なハード整備をしても中心市街地の衰退が進んでいくといことで、平成 10 年に鳴り物入りでこの法律が出来ました。空洞化が進む中心市街地の活性化のための総合的な対策として、「市街地の整備改善」と「商業等の活性化」が二本の柱でした、これで中心市街地の商店街の活性化を進めようとしたのですが、補助金のメニューに乗った事業で、中々これでも実効性がありませんでした。その多くが、中心市街地活性化基本計画を策定して、国の承認を得て、中に盛り込まれた補助メニューを実施していくというものでした。そこで平成 18 年に抜本的な改正が行われます。この時に初めて開発主義を反省し、車依存ではなく、公共交通機関の活用とか、歩いて暮らせるまちの実現、歴史的空間を保存活用し、大型店の郊外立地の規制強化とかをうたって改正が行われましたが、これで街が劇的に良くなったという話も中々聞かないですね。何故なのでしょう。

それから少し遅れて、景観に一番関わる景観法が平成 16 年に出来ました。実は、安倍総理が最初の総理になった時、2003 年に「美しい国づくり政策大綱」というのを発表しています。この時の主旨は、国土を国民の資産として、行政の方向を美しい国づくりに舵を切ると言ったのです。今までの方向じゃなくて、襟を正しますといことで、景観法という法律をつくりました。極めて簡潔な法律の名称です。国も上位計画、上位法律といことで位置付けた故に、短い法律の名前になっています。ここでは、住民、事業者、行政の三者の責任を明確化しています。景観計画のための行為の規制です。私的には「行為の規制」は問題があるかなと思っているのですが、行為の規制はせざるを得ないのですが、行為の規制だけで景観は良くなるのか、ということも一つの話題になります。

この次に平成 20 年に、若干法律の性格は違う「歴史まちづくり法」という法律ができました。これは地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律ですが、基本的に、国の重文級のものが都市でしか適用を受けることができません。そこで、規制を主とした景観法に対して、市町村が行う様々な歴史まちづくりの取り組みを支援する法律です。私はこの法律の説明会に 2 回ほど行き、国交省の担当者のお話を聞かせてもらいましたが、「影の目的として、地盤沈下が進んだ地方の中心市街地活性化の最後の切り札だと思っています。都市基盤整備、インフラ整備とか商業の活性化だけでは無理で、地域固有の歴史とか文化とか伝統をまちづくりに活かしていかない限り地方都市の再生はない。表だって言わないけれど、そういう思いを持って法律を制定しました。」ということ、国交省の担当者が文章に残さないところで語っています。この法律は国交省と文科省と農水省の連携の法律です。

そんなことを見てくると、国の政策が最初の市街地整備のハードの整備から文化に移ってきていることが判ります。これを早く受け止めて、国の制度を手法としてうまく取り入れながら、活性化に取り組んでいくことが、今地方にいる我々に求められているのではないかと思います。

Ⅲ. まちづくり試行:知ってもらう試み

ふるさとの記憶を未来につなぐ:いせさき街並み研究会の試み

ここからが私が取り組んでいる活動の紹介です。あくまでも「試行」、知ってもらう試みです。実は「知る」というのがまちづくりの第一歩だと思っています。今も知ってもらうことばかりをやっていますが、まだまだ知ってもらえていない。先ほどの曳家とか、おばあちゃんとの出会いとか、そういうことを体験する中で、やはり知らないこのまちの記憶を生かすことはできない。そのために主に設計をやってる仲間に声掛けして、「いせさき街並み研究会」を2003年に立ち上げました。基本的には地域性に目を向けて、調査・把握する。その把握したものの特性とか価値を広く市民に伝えて、出来ることなら具体的な提案まで取り組んでいこうと。それは行政に言われたからではなくて、自分たちが主体的に取り組んでいくんだと言う、市民主体の地域づくりの団体組織を目指して立ち上げました。

始めた頃はとにかく知ってもらうために、色々なことをやりました。市内に残っている石蔵や登録文化財の調査、まち歩きマップの作成や案内、そしてペーパークラフトの活動です。直接的なきっかけは2009年、JR両毛(りょうもう)線の高架事業に併せて駅舎の建替が進もうとしていました。けれども古いものを壊す時に、その古いものがこのまちの歴史にとってどんな役割を果たしてきたのかを誰も検証せずに、ただ事業という名の下に壊してしまうと、そのまちの記憶が無くなってしまいます。最低でもここにあったということを検証して、いかにこのまちを支え、近代化のために役に立ってきたか、意味があったかということ、やはり紐解いてあげないといけないと思うのですが、誰もやっていない。駅の建替策定委員会が持たれて、その議事録を見せてもらいましたが一切そういう議論はありませんでした。

そこで改めて駅の歴史を調べてみると伊勢崎銘仙の繁栄の歴史ばかりでした。2階には要人を迎えるための立派な貴賓室がありました。改装による天井材を解体前に剥がしたら、中にシャンデリアを架けた立派なセンターリングという漆喰細工が4基残っていました。そんなことも誰も知らなかった訳です。そういうものをきちんと調べて、少なくともこれだけ貴重なものがあるって、これがまちの近代化をこういう側面から支えたんだということは伝えないといけない。壊すことが決まる前には、高架にするのであれば、機能としての高架のプラットホームを造り、旧駅舎は、顔として手前の方にちょっと出して、それで生かすことを最初に提案しました。しかし、新しい駅舎計画は変えられないということで、それでは駅前広場に持って行って、鉄道の駅からまちの駅として活かせないかと提案しました。この鉄道で訪れた人は、必ず駅前の「餅の小道」を歩いて旧駅舎に入っていく。そこに案内所があり、サロン、資料展示、喫茶などもあって、そこを歩いて街へ出ていく。また、帰りはそこを歩いてこの街を去って行く、みたいな物語を創って市長に直接提案をしましたが、2カ月程後に、予算とスケジュールの問題で実現できないと言うお返事をいただきました。

それでは、この伊勢崎駅が確かにここにあったということを伝えるにはどうしたらいいのだろうということで、活動の目線が子供たちに向いていった訳です。子供たちや若いお父さんお母さんを対象に古い建物等に触れ、楽しみながら知ってもらうための活動を模索しました。

そして第1弾として始めたのが、2010年、地域に学び、故郷を知る、親子で楽しむまち歩きと伊勢崎駅ペーパークラフトづくりでした。メンバーが手弁当で駅の実測をして、建築図面にしてお手元にあるようなペーパークラフトの台紙を自分たちで製作しました。駅が無くなる直前でしたから、イベントの参加者だけでなく、駅周辺のお父さんお母さんたちにも、みんなで記念撮影をしましょうと声をかけて、駅前に結集しました。

そして駅舎周辺のまち歩き、実は子供たちへのまち歩きの案内は大人よりも難しく、興味を持ってもらうためにクイズを出すなどの色々な仕掛けをして、1時間半のまち歩きを楽しんでも

らえるよう考えました。



今は無き伊勢崎駅舎前に結集した市民・参加者

私のまち歩きのご案内は歴史を伝えるだけではなく、普通にまちのそこかしこにあるものの話をします。例えば瓦一枚とっても、形状は戦後の瓦と今の瓦は違います。だから瓦一枚である程度の時代考証ができ、そういうこともこのまちを知るヒントです。フランス瓦もその時代の嗜好で使われた時期がありますとか。そういう話をすると皆さん興味を持ちます。ただ「この建物が何年に出来て建築の特徴がある。」と言うだけでなく、まちの読み解き方というのは様々、沢山あるのです。先ほど話しました道の形一つとっても、食い違った道を区画整理で、みんな真っ直ぐにしてしまう訳です。「昔はこう（かぎ状）だったから敵からこのまちを守れたんですよ。」「今こうしたら歴史の痕跡は無くなりますよ。」「食い違った道を逆に誇りにすれば良いのですよ。食い違った道だからこのまちなのです。」と。そういう目線で見えてあげるような種を一杯説明します。そうすると、思った以上に皆さん興味深く、1時間半まちを歩いてくれます。

その後、1時間半かけてペーパークラフトを作りました。出来上がるとみんな自慢そうです。「出来たよー！」っていう子が一杯です。子供達にはちょっと難しい部分がありますが、お父さんお母さんも一緒になって親子の共同作業を続けると、何かこう温かいものが伝わって、良い時間を貰います。

駅には色々な方の記憶が埋め込まれています。お会いしたことのないあるご年配の男性からお手紙を貰いました。そこには切々と綴られた言葉がありまして、「実は、あの駅は私の20歳の息子を日章旗とともに送り出した駅なのです。そしてその2年後に一握りの砂となって帰ってきた息子を迎えた駅でもあるのです。」と。その方にとっては出兵した息子さんの記憶が駅舎に埋め込まれているのです。

あとはまちづくりのトークセッションも行いました。そこへ足を運んでくれたご年配の方が「実は私たちここで働いていたのです。懐かしい。この駅がな



駅周辺まち歩き



旧伊勢崎駅舎ペーパークラフト

くなるのは寂しい。」ということを言われました。みんなそうなのです。生きた証が駅舎に埋め込まれているのです。それを大事にしていきたいなと思いこのような活動をずっと続けています。



親子でのペーパークラフトづくり



親子でのペーパークラフトづくり



「できたよ！」



旧時報鐘楼前に集合

次に作ったのは市の文化財になっている「旧時報鐘楼」という時を告げる大正 4 年建築のレンガ造風の鐘楼です。構造は鉄筋コンクリート造ですが、レンガ風の中々少ないです。木造が圧倒的多数です。この年（2011 年）は東日本大震災の年で、本当は 3 月の震災の翌日にやる予定だったものを半年延期し、夏に実施しました。

その後は「旧境運輸倉庫赤煉瓦（レンガ）倉庫（2014 年）」で、大正 8 年建築の繭の保管庫です。これは形がシンプルだったため初めて中まで作りました。屋根が外せて、本当はトラス梁が 21 本入っているのですが、全部は作れないので 7 本だけ梁を作りました。中を開けると、2 階の床も外せて 1 階まで見えるようになっていて、結構手が込んだものでした。実は、作るのに四苦八苦しなごうだったのですが、出来上がると立派なものです。

次は、今皆さんのお手元にあります「田島弥平旧宅（2015 年）」です。ぜひ、皆さんこれを作ってみてください。山折り谷折り線が一杯あり、そのまま折ろうとしてもきれいに折れませんので、カッターなどで軽く切り込みを入れてから折ると、きれいにピン角が出ますが、そこまで結構時間がかかります。このペーパークラフト作りはイベントでは 1 時間半でやっけていまして、とても終わらないので、私たちが、事前に全部切りぬいて、筋を入れたモノを用意して、作ってもらっています。



旧境運輸倉庫赤煉瓦倉庫、できたよ！



田島弥平旧宅前に集合



マスコットくわまると、出来たよ！



旧田島弥平旧宅ペーパークラフト

1 時間半のまち歩きをした後、若いお母さんから実はこんな言葉を貰いました。「子供がペーパークラフトづくりに参加したいと申し込んだのですが、実はプログラムにあったまち歩きは嫌だと思いました。子供がやりたいというので申し込みしたけど、まちなんか歩く趣味はないし、歩きたくなかったのです。でも、実際に案内を聞きながらのまち歩きは、興味深い話ばかりで 1 時間半があつという間でした。自分たちのまちにこんな大切な歴史があつて、まだまだそれを伝えるものが残っていることを初めて知りました。本当にありがとうございました。」と。ペーパークラフトづくりの前でしたが、本人は初めて知った発見の喜びをどうしても私に伝えたくて、

歩き終わった直後に私のところに来て、伝えてくれたのです。これは、イベントを仕掛けている側としては本当に嬉しい瞬間でした。まさにこういうことを目指してやっているのです。子供たちもそうですが、実は若いお父さんお母さんのほとんどが、我がまちの歴史を知りません。どんな歴史があって、どんな生い立ちがあって、どんな人たちが暮らしていたかということ、本当に知らないですね。そういう状況の中でこのイベントを計画した側としては、非常に嬉しい反応でした。

実は、昨日、第6弾のまち歩きとペーパークラフトづくりをやってきたばかりです。この建物は昭和の初めに群馬県が造った蚕病の検査所でした。2階が講堂に、1階が事務所になっています。モダニズムという近代建築の様式で、庁舎建築としては初期の鉄筋コンクリート造で、それ自体に建築的な価値があるのですが、群馬県がこういう検査所を明治の後半に県内に13か所造った中で、唯一現存しているものです。



旧群馬県蚕業取締所境支所

色々な経緯があって、現在は伊勢崎市が所有していますが、耐震的な課題があるということで10数年間手つかずのままです。蚕糸養蚕業発展の歴史を伝えるものとして、何とか光を当てたいということで、今回ペーパークラフトづくりの対象にしました。

更に協働の景観まちづくりということで、先ほど出た黒羽根内科医院旧館、愛称「いせさき明治館」が100歳となった平成24年にお祝いしようと、市内の15団体に声掛けして実行委員会を立ち上げました。私も発起人の一人で、実行委員長を務めました。建物は伊勢崎市が所有しているため、いせさき明治館の代理人として市長に慶祝状を送りました。子供たちがハッピーバースデーを歌い、みんなから集めたお金で作った誕生日ケーキを分けて食べたり、ミニコンサート等やって最後にシュプレヒコールをしました。この後、15団体が半年間かけて、「いせさき明治館100年物語」という名前を冠して、それぞれのイベントを行いました。このように必要に応じて市民が、市民団体等が緩やかに手を繋ぐというようなことを仕掛けています。



いせさき明治館百年アニバーサリー



ハッピーバースデーケーキカット



慶祝状授与(代理人市長へ)

この様な活動を通して、ふるさとの種を植えるということ、少しずつやってこられたかなと思っっています。

もう一つは、私は設計を業としていますので、自分が設計をする時に、中々全てを目指すことは難しいのですが、仮に自分が造った建物が100年残った時に、100年後の人に「本当にいい建物ですね」と言われるのを造っているだろうか。そういう視点を持って取り組みたいと思っています。

原爆により壊滅的な被害を受けた広島市が10年以上前でしょうか、名前を詳しく覚えていないのですが、確か「ひろしま2045プロジェクト」というものを始めたこと記憶しています。あれほど壊滅的にまちが壊れてしまった広島市が、1945年の100年後の2045年に「豊かな広島市になれるようなまちづくり、都市づくりを今、進めていくんだ。」という都市づくり宣言をしたのが記憶にあります。

そういうことを意識を持つことが大切で、我々みたいな業を持っているものはわきまえないと

いけないと思っています。建築の業界を見ても目先で儲けることばかりを追求する指向が強いです。結果として建築も消耗品になっています。ただども、建築は本来文化の種、文化の貴重な抛り所なんだということを、これからも自負していきたいものです。せっかくこういう仕事をする訳ですから。

そういう活動を手弁当でやってきて、何が会員の頑張る力になってるのかなと思うと、参加して頂いた方のリアクションなのですね。ちょっとした言葉、表情、笑顔、そういうものがみんなの力になっている。言葉を代えると、自分の時間を人のために、地域のために使う喜び、それを実感できますね。日本にはそもそもそういう文化がありました。イギリスの女性旅行作家イザベラ・バードは幕末の日本を絶賛してます。日本のお母さんは人の幸せばかりを考えている。お金は無くても貧しくない。日本はそういう国だと絶賛しています。そういう土壤がかつて日本にありました。そんな風土にもう一度光を当てられれば良いなと思います。

男所帯の街並み研究会に女性が一名います。この子が一生懸命ペーパークラフトづくりをやっています。今 13 人でやっていますが、出来ることはそんな大きな花火を上げられません。ただども、みんなで楽しくやりながら、それが周りの人たちの喜びになっていく。そんなことで自分たちも喜びを得られているような気がします。

IV. エピローグ:まちづくりメッセージ

最後にエピローグということで、私のまちづくりメッセージをお話します。私の活動の中から自分なりに感じていることです。

「古い建物のないまちは、人格のない人間のようなものです。古い建物というのは、別に文化財ということではありません。自分たちと共に生きてきた建物という意味です。人格とはその人が生きてきた証として、その人の中に形成された記憶の結晶です。この記憶のない人、記憶喪失の人は、自分が何者であるかを認識することが難しく、真の幸福感を得ることが難しいかもしれません。同じように記憶喪失のまちは、そのまちのアイデンティティを確立することが難しく、そこに住む人の心を真に満たすことが難しいと思われれます。ですから、古い建物を大切に、ふるさとの記憶を未来に繋ぎ、これからのまちづくりに生かそうという取り組みは、決してノスタルジーではなく、このまちがこのまちにしかできない地域固有のアイデンティティを確立したまちづくりを進めるためには、言葉を代えとこのまちがこのまちであり続けるためには、欠かすことの出来ない大切な取り組みの一つであるということなのです。」

お手元のレジメにはその後に「続けた言葉」が書いてありますが、お時間のある時にお読みください。こういう取り組みは私にとっては未来に向けた活動だと思っています。過去を知ることは未来を知るために欠かせないことだと思っています。出来ることは細やかですが、皆様にも様々なステージがありますので、出来ることをそれぞれのステージで一つずつ形にしていくことが、まちづくりに繋がっていくのではないかなと思っています。

以上、私の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

注) 以下は上記の「その後に続けた言葉」です。

このまちを築いてきた古いものたちを景観まちづくりに生かすということ、ふるさとの記憶を未来に繋ぐということは、決してノスタルジーではなく、愛着と誇りを持って暮らし続け、次の世代に引き継ぐことができる『我がふるさと』を創ろうという、未来に目を向けた取り組みです。それらは特別な文化財ではないかもしれませんが、このまちを語る上では欠かせない大切なもの、このまちのDNAと呼べるものと思われれます。景観まちづくりとは、このまちに住む人達の幸せづくりなのです。